（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　西村　聡生

本論文は、視知覚に基づいて形成された表象が反応行為へ与える影響に関して、刺激反応適合性に着目して実験心理学的に研究したものであり、全５章から構成されている。

第 1 章では、刺激と反応の位置に対応関係があるときに反応が容易になる現象である刺激反応適合性に関する従来の研究を概観し、外界での刺激位置およびその空間構造の符号化過程において解明すべき様々な課題を指摘する。これらの課題に取り組み、行為に影響を及ぼす知覚特性として理解する重要性に言及している。

第 2 章では、刺激位置を規定する参照枠について検討する。複数の視覚刺激が上位ユニットにグループ化され、個々の刺激の空間位置を超えてその上位ユニット位置に基づいて符号化されるには、上位ユニットを明示的に示す視覚手がかりは不要であり、それらの刺激が同一の反応に割り当てられていることが重要であることを明らかにしている。逆に、それらの刺激が同一反応に割り当てられていない場合には、視覚手がかりがあっても個々の刺激の空間位置に基づく刺激反応適合性効果が生じることも示している。これらの結果より、上位ユニットは刺激位置の表象において常に優先的な役割を果たすわけではなく、参照枠の 1 つとして作用することや、知覚と行為の双方向的な影響を明らかにしている。

第 3 章では、左右同側の反応を活性化する位置の表象を形成する刺激について検討する。中央の標的刺激に対して反応する課題で、左右に提示される付加刺激の出現と消失による反応への影響を検討したところ、出現、消失ともサイモン効果、すなわち位置とは無関係な課題における刺激反応適合性を生じることを明らかにしている。この結果から、知覚から行為への影響における刺激位置のダイナミックな表象について論じている。

第 4 章では、刺激位置に伴う空間の極性構造の符号化と、その表象について検討する。刺激位置のみならずその空間極性構造も自動的に符号化されることから、極性に基づく対応による知覚から行為への影響は自動的に生じることを明らかにしている。

第 5 章では、すべての実験結果をもとに、刺激反応適合性において反応行為に影響する知覚表象について総合的に論じる。特徴共有に基づく知覚と行為の相互作用は従来考えられてきた以上に密接だが、一方で知覚表象そのものが様々な要因により変調されることを論じている。注意を介して知覚と行為が相互作用している可能性についても言及している。

本論文は、刺激反応適合性における視覚刺激の空間的表象の解明に総合的に取り組み、知覚と行為の相互作用において行為を自動的に導く知覚特性を明らかにしており、この成果は実験心理学研究における顕著な業績である。以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（心理学）の学位を授与するのにふさわしいものであるとの結論に達した。